

# サン・シモン、フーリエ 対 オウエン

— 思想形成の仏英比較 —

堀 井 敏 夫

【要約】 サン・シモン、フーリエ、オウエンは、殆んど同時代の仏英の社会思想家であり、従来、三人が一空想的社会主義者、又はフーリエとオウエンが「組合派社会主義者」と同じように目されてきた。このような見方は、三人又は二人の確かな共通点に支えられているから、勿論正しい面を持っている。しかし、比較の指標を現実問題に置いて思想の差異点を探って見るならば、別の見方が可能である。同じく労働者保護を指向しながらも、サン・シモンとオウエンとの差異は大きい。ユートピアの構図が瓜二つであるにも拘らずフーリエとオウエンとは違う。他方、同国人のサン・シモンとフーリエとは、現実認識と処方箋の類似点を持っている。サン・シモン、フーリエとオウエンとの思想が、それぞれ英仏海峽をはさんだ別の国の運命を背負っている事、加えて三人の思想が、それぞれ元貴族(サン・シモン)、商店員(フーリエ)と工場経営者(オウエン)という別の境涯をも映している事を本稿に示したい。以て各国比較の上に立つフランス社会主義研究に資する所があれば幸いである。史林 四八巻五号 一九六五年九月

## 序

フランスのサン・シモン(一七六〇—一八二五)、同じくフランスのフーリエ(一七七二—一八三七)、イギリスのオウエン(一七七二—一八五八)の三人<sup>①</sup>に関する研究は、三つの時期と三つの類型に分たれる。第一に、師の声音に接し

た弟子又はそれに近い人々の遺した祖述の書、伝記の類。

例えば、バザール等による『サン・シモン学説解義』、フ

ーリエの後継者コンシデランの書、ペラランの伝記等がそれである。第二に、三人全部又は中二人を一括して社会思想上に位置づけようとする見方。グリーン等から始めて、エンゲルス、更にシャルル・ジイドの書がそれであ

る。第三に、十九世紀末から二十世紀にかけて、現代社会主義の生成の気運と共に、仏英の専門研究家が三人のそれぞれについて詳細な研究を遺した。<sup>②</sup>

従来サン・シモン研究史上には、サン・シモンの二面性をめぐる解釈の問題があり、<sup>③</sup>フリーエ研究史にもオウエン研究史にも解釈の微妙な相違があつて、<sup>④</sup>そのそれぞれについて筆者の私見がなくはない。しかし本稿では、個別研究に関する問題を必要最小限に留めて、前述の研究の第二類型を問題とする。

最初恐らくピエール・ルルーによって打ち樹てられエンゲルスとラファルグによって完成した「空想的社会主義」<sup>⑤</sup>、*der utopistische Sozialismus*（狭義の概念）は、周知のように、「三人の思想家の同時代——仏英同時点に於ける同質の矛盾を解決すべき労働者階級の未成熟——同質の思想の誕生——ユートピア構想と啓蒙による社会改良」という論理に貫かれている。<sup>⑥</sup>

又、有名な『経済学説史』の共著者の一人にしてフリーエ研究家のジイドは、サン・シモンを別にしてフリーエとオウエンとの二人を「組合派社会主義者」*socialistes*

*associationistes*の代表とした。<sup>⑥</sup>

勿論、仏英二国の思想家達を一つに見ようとしたこの二つの見方の他に、前述の研究類型第三の中に比較論が散見されはするが、断片的であるに過ぎない。従つて、社会思想史又は西欧史の概説に於ては（時には研究論文に於てすら）、エンゲルスかジイドの古い見方のいずれかに従うか、又は三者三様に扱うか、又は便宜上の理由から仏英に分けて叙述するか、である。<sup>⑦</sup>

まず、三人が似ているとして異論のない所は、（一）賃銀労働者を貧困から救済する事を含む人類の解放の思想<sup>⑧</sup>。（二）現実社会危機の意識と未来社会（ユートピア）の構想<sup>⑨</sup>。（三）社会改革の手段としての改良主義。即ち、宇宙法則に比すべき社会法則の発見<sup>⑩</sup>。公共教育の実施。既成の宗教道徳の否定と愛他主義の普及啓蒙<sup>⑪</sup>。以上の諸点である。更に、フリーエとオウエンの二人だけを取り出せば、上の類似点以外に、「ファランジュ」と「統一と相互協同の村」との類似点<sup>⑫</sup>、結婚制度批判・女性解放論の類似点が附け加わる。

このような共通点がある限り、エンゲルスの見方もジイドの見方も説得力を持っている。にも拘らず、差異点を究

めて見なければならぬ根拠を次に提示したいと思う。

第一。仏英社会が同じ発展段階にあったために同じ思想が生れた(エンゲルス)という面とは反対に、むしろ違った社会の現実から同じ思想が生れたという面はないのか。<sup>⑤</sup>

第二。「フーリエとオウエンとは全く相異なる二つの世界に生活していた」(ジイド)からには、両者の思想に違いが生じなかったのか。

第三。晩年のエンゲルスは、マルクスの手稿によって、サン・シモンとオウエンとの差異に気付かせられたという事実がある。<sup>⑥</sup>

第四。戦後、デボーリンやモートンのようなマルクス主義者のオウエン研究家も、他の二人に対するオウエンの独自性を二・三指摘している。<sup>⑦</sup>

第五。三人の共通点として挙げた前述の諸点は、ヒューマンイズム一般に属する諸観念と云ってもよい。もし観念を下げて現実の具体的な社会問題を指標とすれば、差異は拡大するのではないか。

なお、従来の研究は、思想形成上三人相互の交渉関係は薄く、各々が独自に思想を抱懐したと教えている。<sup>⑧</sup> そうで

あればある程、仏英思想家の比較は、相互影響の研究というより、比較史的研究の一面を持って来る。この事こそ、筆者の及ばない力量を必要とするものであり、同時に興味を喚起するものである。

以上の次第によって、『サン・シモン著作集』十一巻、『フーリエ全集』六巻、オウエンの諸著作を読み比べ、<sup>⑨</sup> もつてサン・シモン、フーリエの二人とオウエンとの差異を述べる。比較の指標として選ぶものは以下の節の問題である。

① Claude Henri de Rouvroy, comte de Saint-Simon. Francois Marie Charles Fourier. Robert Owen.

② 例えば、サン・シモン研究の Maxime Leroy、フーリエ研究の Hubert Bourgin、オウエン研究の G. D. H. Cole が代表的であろう。

③ 坂本慶一『フランス産業革命思想の形成——サン・シモンとサン・シモン派——』一九六一、一一——一四頁。

④ フーリエについては、資本主義体制批判・体制変革の諸要素を強調して「社会主義者」とする Engels や R. Garandy、消費協同組合主義の祖とする Ch. Gide、両者の折衷的な立場と思われ M. Leroy、エンゲルス『空想より科学へ——社会主義の発展』大内兵衛訳、岩波文庫、特に二一頁。

⑤ ジイド、リスト原著『経済学説史』宮川貞一郎訳、上巻三二六頁以下。

⑦ 例えは「トリオ叢書」G. J. Droz, L. Genet, J. Vidalenc, «Cléo» IX, L'Époque Contemporaine I, Restaurations et Révolutions (1815-1871), 1953, pp. 46-49.

⑧ 人類解放の中に貧窮労働者階級の救済をプログラムとしてごうたかどうかに関しては、三人の中最も疑わしいのは、サン・シモンの場合である。しかし、筆者は、『産業論』等の時期よりは更に晩年の『産業体制論』(一八二二)『新キリスト教』(一八二五)の頃には、貧窮労働者の解放を強く意識していたと見解に賛成である。なぜ、この後の著作の中に出てくる「最貧しい最大多数の階級」とは、決して「産業者」全体を指すものではなく、「下層の産業者」つまり「腕の労働者」を指すものではないか。Du système industriel, 6<sup>e</sup> vol. (XXII), p. 81, «cette classe...» Catechisme des Industriels, 8<sup>e</sup> vol. (XXXVII), p. 191 l. 21-p. 192 l. 1. De l'organisation sociale, 10<sup>e</sup> vol. (XXXIX), p. 124 等の箇所に表示された用語を比較すれば、la classe ouvrière, la classe des prolétaires, la classe qui n'a point d'autres moyens d'existence que le travail de ses bras が très-nombreuse である、c'est les chefs des travaux industriels, industriels opulents の対立概念であることがわかる。

⑨ フーリエ、オウエンのユートピアは共に非資本主義的であるが、しかしサン・シモンの目指す窮極の体制 système industriel は「純粋培養型資本主義」(水田洋、水田珠枝『社会主義思想史』一九五八年、一八一頁)の社会である。従って、ユートピアの質を問題にしない限り、に於て「ユートピア構想」という共通点が三者間に成立する。

⑩ 三人各自発見した法則を、自然科学に於けるニュートンの万有引力の法則(サン・シモン、フーリエ)、宇宙法則(オウエン)に比してゐる。例えは Owen, a new view of society, p. 64 楊井克巴

訳一〇六頁。

⑪ St-Simon, L'Organisateur, 4<sup>e</sup> vol. (XX), p. 55 et p. 57. Fourier, Théorie de l'unité universelle, t. IV (œuvres t. 5). Owen, an Address to the Inhabitants of New Lanark, pp. 93 seq. 訳九頁以下。

⑫ Saint-Simon, Nouveau Christianisme, 7<sup>e</sup> vol. (XXIII), pp. 97 seq. Fourier, Théorie des quatre mouvements et des destinées générales, (œuvres t. I), pp. 293 seq. Unité universelle (Théorie de l'unité universelle 略記), t. IV (œuvres t. 5), p. 394. Owen, A New View of Society pp. 17 seq., pp. 47 seq. 楊井克巴訳岩波文庫三二頁以下。Owen, The Life of Robert Owen by himself, pp. 281 seq. and pp. 288 seq. 五島茂訳岩波文庫三二五頁以下。三六三—四頁。

⑬ «Phalange» (de Fourier), «Village of Unity and mutual Co-operation» (of Owen)。小自治集団であるが、広をば「村」の方が狭いがとにかく「村」を単位とし、人口も大差がない事、食堂その他の共同設備を中心に生活が展開をされる事、農業を重視し田園風である事、社会関係に於て雇主・雇人の別がない事。

⑭ Fourier, Quatres Mouvements (t. I), pp. 153-224. 副田満輝訳「運動の理論(上)」世界古典文庫二〇九—二八八頁。(以下、Théorie des Quatres Mouvements et des destinées générales を「4つの略」) Owen, The Marriage System of the New World, 1838.

⑮ 結論の一つを先取すれば、フアラシムと「村」とは、違った現実認識から生れた同じような構想であると筆者は考へる。

⑯ 『資本論』第三卷第三六章、岩波文庫版(十)四六三頁註二四。但しエンゲルスは「究想的社会主義」概念を棄てたわけではない。

⑫ A. M. Deborin, Uchenie Oueua, 1958, p. 607, p. 609. 『歴史の諸問題』所収。藤本和貴夫氏の教示<sup>246</sup>。A. L. Morton, un demi siècle d'utopie, de Robert Owen et Ch. Fourier à W. Morris, 《Pensée》No. 108, avril 1963, pp. 29-31.

⑬ サン・シモンとオウエンとの関係は余りなかった。⑭ フリーエとオウエンとは思想上語り合って居り、フリーエ死の年に二人は会った事<sup>247</sup>。Hubert Bourgin, Fourier, Contribution à l'étude du socialisme français, 1905, pp. 106-114. Owen, Life by himself, p. 322 and p. 328. J. Gaus, Robert Owen à Paris en 1837. 《Le Mouvement Social》, numéro 41, oct—dec. 1962.

⑮ Oeuvres de Saint-Simon et d'Enfantin, 1865-78, XVe vol., XVIIIe-XXIIIe vols., XXXVIIe-XLe vols., Oeuvres de Saint-Simon, 11 vols. 京都大学所蔵。本稿への引用明示は、「作品名又はその略記」Oeuvres de Saint-Simon の巻数、括弧内は作品名又はその略記。Oeuvres de Saint-Simon の巻数、括弧内は作品名又はその略記。Oeuvres de Saint-Simon の巻数、頁数」の順序。⑯ Oeuvres Complètes (de Ch. Fourier), 6 vols., 1841-1845. 京都大学所蔵。本稿への引用明示は、「作品名又はその略記」括弧内は Oeuvres Complètes の巻数、頁数」の順序。⑰ Robert Owen, A New View of Society and Other Writings, Everyman's Library. 本稿への引用は「作品名又はその略記」Everyman's Library 版の頁数。『新社会観』楊井克巳訳岩波文庫の頁数又は、『社会変革と教育』渡辺義晴訳(一九六三)の頁数」の順序。⑱ Owen, The Life of Robert Owen by himself, with an introduction by M. Beer, London, 1920. 本稿への引用は「Owen, Life by himself の略記」その頁数。『オウエン自叙伝』五島茂訳岩波文庫の頁数。』の順序となる。

## 一 呪うべき階級

市民革命の後にもなお運命的に貧困な階級が存在する事を問題にしたのは、フランスではバブーフ<sup>①</sup>、サン・シモン、フリーエの功績であり、中でも都市的工業的な社会階級の貧困の指摘は、後二者の徳である。イギリスでは、オウエン以前に既に論議的となっていたとは云え、オウエンも同じ役割を果たした。しかし、貧困な階級をそうあらしめる支配階級の見方については、仏英、次のように違ふ。

サン・シモンが排撃した「人間による人間の搾取(利用)」とは、「非生産者」《non-producteurs》が「生産者」《producteurs》から甘い蜜を奪うことに他ならない。怠惰有閑の寄生者たる大土地所有者、利子生活者、上層の官僚・聖職者に対するサン・シモンの毒舌は激しい。<sup>③</sup>

サン・シモンも商人の投機活動を非難しているが、フリーエはもっと徹底的に排撃した。フリーエが生涯商業批判を続けたことについては周知であろう。<sup>⑤</sup>ただし筆者は、その商人が次のように前期的な性格を強く持っていることに注意したい。即ち、(一)フリーエの挙げる実例では商業

利潤が余りに大きい。(二)他の競争者を締め出し、独占する特権商人。(三)農産物等の流通過程で買占めや投機をやる商人。(四)戦時経済の混乱につけ込む商人。(五)農村にもぐり込む高利貸。(六)小規模な製造業を支配する問屋制商人。いずれも流通機構・金融市場の未整備というような、むしろ資本主義経済の未発達状態に寄生している商人をフリーエは攻撃したのである。

イギリスに於て地主の寄生性は哲學的急進主義者が問題とした事であつて、オウエンの中に地主攻撃を見出すことはできない。又、オウエンも商業精神を非難しているが、儲け主義という意味で同僚の資本家(アトキンス氏等)の營利主義を念頭に置いていたのである。投機的でない健全な小売商の商店員だった事のあるオウエン、当時「下院で優勢な製造工業者階級」の利己主義と対決しようとしていたオウエンは、前述のような商人と接していたフリーエ、「品質不良品の製造工業者」のみを「寄生者」として製造工業者そのものは社会に必要不可欠なものとしたフリーエと、同日に論ぜられない。

サン・シモン、フリーエの呪いは、対象のずれはあるが

論理を同じくしており、いずれも生産に無関係な人々が生産に従持する人々を圧迫するものとして扱っている。従つて、資本家対労働者の関係は、生産者の内部関係として扱えられる事になり、二人の階級認識は二重になる。即ち土地貴族・商人対生産者、その生産者の中の資本家対労働と。サン・シモンの主要攻撃目標が土地貴族にある限り、彼の労働者階級に対する善意の観念は、歴史上の運命に於て自由主義思想の運命に近いものとなり、七月・二月兩革命の後も生き延びる事は困難である。フリーエの場合も、貧困階級論、中間搾取のないユートピアの構想、経済の無政府性指弾が古い型の商人批判を基底として居る限り、その社会批判は(たとい資本主義批判と呼ぶにしろ)、長生できない性格のものである。やがて仏英労働者政党的誕生期ともなれば、オウエンと他の二人の意義の差は階級観の点でも決定的となるであろう。

このような階級観の差異は、形成上からどのように説明できるか。第一に、個人的な事情として、元貴族サン・シモンが土地貴族の内幕を、元大商人後商店員のフリーエが

商人の内情を、半生経営者のオウエンが資本家の事情を、それぞれよく知っていた事による。しかしも前二者の場合、それぞれ元所属の階級から脱落した事によって観察の客観性が増し、毒舌の遠慮の無さが可能になったという事も加わっている。

第二に、サン・シモンの土地貴族攻撃は、勿論王政復古下の旧勢力復活を抜きにしては考えられない。<sup>②</sup>彼の呪いの激しさは、貴族階級に対する妥協を許さなかったフランスの激しさである。それに対して、資本家批判のオウエンが貴族と結んでいるのは、貴族が労資対立の外に第三者として存在するイギリス社会の特質と関係がある。

第三に、フランス大革命は工業を直接刺戟する事はなかったが、商業発展の道はすぐにも開いた。<sup>③</sup>その後も革命、戦争が経済を混乱させ、経営者型よりも投機商人・政商型の人間が活動し易い状況にあった。<sup>④</sup>ここにフーリエの思想が誕生したのである。

① «Classes indigentes», *Manuscrit inconnu de Babeuf*, A. H. R. F., 1960, p. 349. 但しハンノンの貧困階級とは「農村的農業的であらう」。

② フーリエは一見農業的であるが、工業的都市階級の貧困を見逃しは

しなかった。例えば *Nouveau Monde* (t. 6), p. 379.

③ *Oeuvres de Saint-Simon*, 3e-4e vols. (XIX-XX) に取められた諸篇及び *Catechisme des industriels*, 8e vol. 等の到る所。比喩的な表現としては「特」<sup>①</sup> *Sur la querelle des abeilles et des frelons*, 1819, 3e vol. (XIX), pp. 211 seqq. に展開せよ。

④ *L'Organisateur*, 4e vol. (XX), p. 209.

⑤ «*Charta teneries Commerciales*» 1807 ou 1808 の著作以来生涯のテーマの1つが商業批判。

⑥ *Theorie en abstrait, ou négative*, (t. 3), p. 216.

⑦ *Quatres Mouvements*, (t. 1), p. 394.

⑧ *ibid.*, p. 358, p. 396, p. 405.

⑨ *ibid.*, p. 368. *Unité universelle* t. 4, (t. 5), pp. 422-4.

⑩ *Sommaires et annonce du Traité de l'unité universelle*, (t. 2), pp. 135 seq.

⑪ *Unité universelle* t. 2, (t. 3), p. 217.

⑫ フーリエの挙げてゐる周知の実例、即ちバリとルアンとのりんこの価格が百対一である事(ガロデー「近代フランス社会思想史」平田清明訳一五三頁)は、誇張だとしても当時の商品価格の地方差がいかに大きかったかを想像しよう。従って我々はフーリエを単純に資本主義批判者とするだけでは満足できない。

⑬ J. Mill, J. S. Mill. なおリカード派社会主義者 John Gray も不生産階級を攻撃してゐるが、労働全取権思想の上に立って居り、サン・シモンと同日の談ではない。

⑭ Owen, *Life by himself*, p. 121. 訳一六四頁。

⑮ *ibid.*, pp. 16 seqq. 「マックスカンオット氏は正直で掛値がな……」訳三四頁。

⑯ *ibid.*, p. 159. 訳二一〇頁。

① Unité universelle t. 3 (t. 4), p. 175.

② Quatres Mouvements, pp. 388-389.

③ 但し、軍人、一部の官吏、投機を事とする商人、法律家弁護士は呪いの対象として両者共通。

④ 誤解をさけるために一言。思想の性格そのものについては、自由主義思想と二点で異なる。① 経済の管理・組織化。② 労働者階級の福祉を第一義とする事(晩年)。

⑤ 通説は、殊にマルクス主義者の説は、フーリエの「産業上の無政府性」指摘を「資本主義批判の第一」に挙げる事もある。例えば Roger Garand, Les sources françaises du socialisme scientifique, 1949, pp. 102 seq. しかし、それにしては、フーリエが政治動乱によって攪乱された経済状態、流通の未発達の状態(二つとも必ずしも資本主義固有のものではない状態)の認識を先ず踏まえていた事に注意しなければならない。そのような認識の上で一八二五年以後の恐慌(資本主義の無政府性)の認識が重なって来るのであるが、フーリエの中での二つの認識がどれだけ区別されていたか問題である。

⑥ 通説に従って「社会主義の復活を仏英同じく一八七・八〇年代とする(D. Ligon, Histoire du socialisme en France (1871-1961), 1962, p. 2. A. L. Morton and G. Tate, The British Labour Movement, 1966, pp. 155 seq.)が、この時に当り、オウエンは Webb, Tawney, Cole 等のイギリス労働党のブレンによって「復活」をせられる。しかし、サン・シモン、フーリエの「復活」は必ずしも労働者政党の理念上にはない。

⑦ L'Organisateur 中の《Parabole》に関する一件は周知でもあろう。その他の注意を喚起しておく。サン・シモンは王政復古直前の著作で地主中心の政治を待望して居た。De la réorganisation de la société européenne, 1814, 1<sup>o</sup> vol., (XV), pp. 200-201. 又貴族

たる誇りも爵位名も棄て切らずに居た。Lettre le 30 mai 1790, par M. Leroy, p. 123. Épître dédicatoire à mon neveu Victor de Saint-Simon, 1810, 1<sup>er</sup> vol., (XV), pp. 96 seq. Oeuvres 1<sup>er</sup> vol., (XV), p. 53. «M. le Comte de Saint-Simon», 76-77. 態度を一変させたものが王政復古の反動であった。

⑧ Owen, Life by himself, pp. 266 seq. 訳三三七頁。Kent 公等がオウエンのノートンであった。

⑨ この事をフーリエ自身明確に認識していた。Quatres mouvements, (t. 1), p. 337. 「それまで低く見られていた商業は、凡そ一七八九年頃に全面的な勝利を得……」。

⑩ この事も認識していた。Unité universelle t. 2, (t. 3), p. 205 「商人と銀行業者とが街路の両側に立ち並び、……投機業者が策を弄する」。

## 二 労働

生産階級を攻撃する事を裏返せば、生産労働を讃美する事になる。サン・シモン、フーリエでは、経営者の才幹も賃銀労働者の肉体労働も同じように貴いものとなる。<sup>①</sup>

サン・シモンにとって、雇主と労働者は、生産を至上目的とする者の分業関係であって、後者の従順が当然と考えられている。<sup>②</sup> フーリエのユートピアに於ては、個人へのサーヴィス労働でも賃銀報酬の型態を取らないという画期的



な点はある。③が、実際の労働は、(一)貧乏人と金持との間に労働時間の差を設けている。④(二)労働時間は十四・五時間の長きにわたり、フランスの実情そのまま、もしくは過酷な位である。⑤(三)老若男女を問わず労働に従わなければならず、しかも特に少年に対しては、その純粹素朴さにつけこみ少額の報酬で煩しい労働に早朝三時から就かせようと考えている。⑥(四)休日を取って労働を休むのは「寄生者」であると考えられている。⑦

以上によって、次のように云える。サン・シモン晩年の『産業体制論』及び『新キリスト教』は、働く者の境遇改善と資本家側の利益擁護との両立という点で、初期オウエンの労働者保護主義と共通する思想であるが、⑧サン・シモンでは労働条件についての改革案が明らかではない。フリーエの「魅力労働」の思想もまた指向する所は労働者の待遇改善と生産力の維持との両立ではあるが、彼の提案を實際適用するとすれば労働強化と婦人・年少者労働の容認を招くものであった。⑨

これに対しオウエンは、自ら経営するニュー・ラナータ工場で、労働時間の短縮(一八一六年には十時間半)⑩、住居の

改善、労働者学校の設立等を行い、その結果を思想上の著作『新社会観』に定着させた。この次第は、五島茂氏を初めとしてオウエン研究の盛んな我が国でも周知の事である。

三人共愛他主義を原理とする程の博愛家であり、又仏英社会のいずれに於ても年少者労働が存在し、⑪労働時間も仏英同じような長さであったにも拘らず、上述のような差異が現われた。それは何故か。

第一に、オウエンが経営者として長時間労働と年少者労働に直面したのに対し、フランスの二人は資本制工業生産のアウトサイダーであったという個人的理由が大きい。サン・シモンの企業経営経験は極く短期間に過ぎず、投機や図書館員等の時期を除いて無為の寄食者であった。だから、彼の有名な「貧困な階級の境遇改善」の繰り返し文句も、生産力視点到馮かれていた日々、「ばくち宿や娼家に入り浸り、札つきの不道德漢の社会を細心の注意を以て」⑫観察を続ける間にふと老いの目に映った光景から口をついて出た言葉であろう。フリーエについては、リヨンと縁が深かったからリヨンの労働者の困窮と失業を知っていたと

いう事は容易に想像される。しかしそれにしても工場の悲惨というフランスよりもイギリスの例を何度も持ち出すのは、彼が商店員にして書斎人だったからである。<sup>④</sup>

第二に、オウエンの企業が、イギリス内の同じ産業部門の中でも優秀企業で、大きな利潤を挙げ得たことが、初期オウエンの労働者保護を可能にした。<sup>⑤</sup>更に、フランスの同製品の工場（皮肉にもサン・シモンがフランスの生産力の担い手と見なした企業家の工場）より製品コストが低い事をオウエン自身が誇っていたが、労働者の厚生施設等に莫大な費用をさく事ができたのは、先進国イギリスの産業を背景としていたからであり、絶えずイギリス商品の攻勢に晒されていたフランスではオウエンの発想が生れ難かったのではあるまいか。

### 第三。次節に述べるように機械力の評価の有無による。

- ① サン・シモンの生産労働 *travaux* は、常に有益なものである。  
L'Industrie, 2<sup>e</sup> vol., (XVIII), p. 128. L'Organisateur, 4<sup>e</sup> vol., (XX), p. 20. 又「ノールトは「ある集團を生産労働」として遊ばなければならぬ」 Manuscripts de Fourier, 129. Cités par Ch. Gide dans «Oeuvres Choieses», p. 1.
- ② Du système industriel, 1821, 7<sup>e</sup> vol., (XXIII), p. 92.
- ③ Unité universe t. 3, (t. 4), p. 526 et p. 530.

④ Nouveau Monde, (t. 6), pp. 67-68. 貧乏人の労働日課表と金持のそれとの間に、労働の種類、食事回数について差があるばかりか、労働時間は一日五時間の差がある。

⑤ Ibid. 貧乏人の労働時間は食事を除き十四時間。

⑥ Unité universelle t. 2, (t. 3), p. 15. Unité universelle t. 4, (t. 5), p. 149, p. 150, p. 163. 当時の状態は、年少者の賃銀が成人の半額位であった。H. Sée, Histoire économique de la France, t. 2. Les temps moderne (1789-1914), 1951, p. 183. だからその点ではフリーエは現状肯定を指向している事になる。

⑦ Unité universelle t. 3, (t. 4), p. 177.

⑧ J. Bruhat, R. Garaudy は「サン・シモンの思想を《paternalisme》として見るが、もしこの言葉から肥めの意味を取り去るならば、この用語に賛成である。St-Simon, Nouveau Christianisme, 7<sup>e</sup> vol., (XXIII), p. 179. その「一八一四年頃までのオウエンをまた《philanthropisme patronal》と云うべきである。E. Dolléans, Robert Owen (1771-1838), 1907, p. 111.

⑨ 通説は、いわゆる「魅力労働」に代って、「フリーエは資本主義社会に特有の強制労働を廃棄した」という見方である。J. Bruhat, Histoire du mouvement ouvrier français, t. I, 1952, p. 198. しかし、筆者が指摘するような半面を見逃す事はできない。労働者に休日を与えそれを確保するための運動としては、少くとも二月革命までは進歩的なカトリック聖職者がこの役割を果たしている。P. Droulers, L'épiscopat devant la question ouvrière en France sous la Monarchie de Juillet, «Revue historique», 1963, pp. 337 seqq.

⑩ G. D. H. Cole, The Life of Robert Owen, 1930, p. 206.

⑪ G. マンズの年少者労働は、二人の思想家の初期の著作時代たる「オウエン時代」は確かに存在した。J. Bruhat, op. cit., p. 162.

フーリエの死後数年の統計では十三万二千人を数える。H. Sec, Histoire économique, t. 2, p. 177. ⑤ イギリスの年少者労働は「オウエン」経営開始時の一八〇〇年 New Lanark の工場にも存在した。Cole, Life, pp. 94 seqq.

⑫ ① フランスの例、食事時間を含めて十五時間位。P. Louis, Histoire de la classe ouvrière en France, de la Révolution à nos jours, 1927, pp. 53 seqq. ② イギリスの例。「普通一日に十四時間。所に依つては十五時間。」(但し、少年の労働時間) Owen, Life by himself, p. 161 訳二二三頁。

⑬ Sa vie écrite par lui-même, 1<sup>er</sup> vol., (XV), p. 85. 大塚幸男訳世界古典文庫(一九四八)四八頁。

⑭ H. Bourgin, op. cit., pp. 33 seqq. et pp. 40 seqq. Fourier, Fausses Industrie, cité par Ch. Gide dans 《Oeuvres Choïsies》, p. 172.

⑮ 例をば、Quatres mouvements, (t. 1), p. 150. 副田訳世界古典文庫二〇五頁。Nouveau Monde, (t. 6), p. 32.

⑯ 商売の傍、図書館通いをした。Manssiet, 1851, p. 23, cité par Ch. Gide dans 《Introduction》 aux 《Oeuvres Choïsies》, p. V.

⑰ 学校開設だけにても全工場設備の一制程度相当額が必要であった。生産性の点でも利潤の点でもオウエンの経営する企業が優秀であった事については、Owen, Life by himself, p. 120, p. 188, etc. 訳一六二頁、二四五頁等。

⑱ Larocheoucault-Liancourt. Saint-Simon, Le parti national ou industriel comparé au parti anti-national, 3<sup>e</sup> vol., (XIX), p. 196.

⑲ Owen, Life by himself, p. 234 訳二九八頁。

### 三 機械・人口問題

サン・シモンは、「科学と産業の結合」を力説して止まなかつたにも拘らず、機械について殆ど言及する所がなく、しかも主として手工業に携わる労働者を念頭に強く置いている。②フーリエも機械生産を殆ど問題にしていな。従つて、生産力に大きく貢献する機械力を充分認識しないで、しかもなおオウエンと同じように豊かな社会を目指すとしたらば、サン・シモン、フーリエに数々の代案がなければならぬ筈である。

前節の差異も一つはそこから生れる。「機械が人間労働の代りを実に多くするようになった」と度々述べるオウエンは、生産のために労働強化を続けるという発想を必要としない。フランスの二人の場合を譬えれば、技術革新の遅れた企業程残業と無休に頼り続けるようなものである。

サン・シモン、フーリエが同じように内外の自然開発事業について種々の提案をしているのも前述の機械力の代案の一つである。③又、海外植民・出生率低下等による人口の停滞を願つたのもこの二人である。この点でサン・シモン、

フリーエは、賃銀基金説のイギリス功利主義者、マルサス主義者に近い。これに比してオウエンは、自然開発を否定する理由はないが、人口問題についてはマルサス主義者ともフリーエとも鋭く対立している。

更に、社会主義の誕生に重要な「豊富の中の貧困」の論理については、オウエンの場合機械力の認識なくしては考えられない。オウエンが「機械が、商品の豊富を作り出すにも拘らず失業と貧困が存在する」と説く時<sup>⑧</sup>、この言葉は産業革命の進行と共に説得力を強めて行くであろう。(しかし、フリーエの中にもある「豊富の中の貧困」の論理は、その「豊富」が植民地貿易による富の流入や大商人への富の偏在等を意味している限り、工業化の進行と共に説得力が失われて行く性質のものである)。ナポレオン戦後の経済危機に際して、オウエンがユートピアを構想するようになるのも、機械力に支えられた豊富さを充分評価した上でその豊富さを失わずして失業救済をしようという難問の前に立ったからである。<sup>⑨</sup> フランスの二人も失業を問題にはしているが、機械を知らない者は現実にはこのような難問を前にしなかった。だから、フリーエの「ファランジュ」の構想は、次節のように別様

の契機によるものである。<sup>⑩</sup>

では、機械不在と機械重視とを結果した背景の差異は何か。

第一。オウエンがイギリスの産業部門中でも成長力の盛んな綿業部門のさ中であつて、しかも自ら機械製造・機械改良をやつてのけるような人物であつた。他方サン・シモン、フリーエの人生経歴や主な居住地が、機械製造業と縁がうすくフランス産業革命胎動の地域とかけ離れていたことである。

第二。機械普及実数の仏英比較は不可能としても、時代に於て機械がフランス社会の静けさを大きく破る程のものではなかったという常識も付け加えて置く。

- ① ④ 筆者の知る限り次の箇所のみである。Saint-Simon, *Opinions littéraires, Philosophiques et industrielles*, Paris, 1825, pp. 374-375. ② 従つて、この上にサン・シモンが鉄道・汽船による交通革命も知らなかった事を考えると、サン・シモンの思想を「産業革命思想」(坂本氏)と云うには留保条件をつけてかかる必要がある。
- ③ サン・シモンは右の箇所、機械採用が肉體労働の価格を高めると薬鏡して、この点オウエンと正反対である。サン・シモンは産業革命の暗い半面を遂に知らなかった。

② Le parti national ou industriel, 3<sup>e</sup> vol., (XIX), pp. 202-203. Catechisme des industriels, 8<sup>e</sup> vol., (XXVII), pp. 3-4 (高木 暢哉訳河出書房三頁)。この二箇所に列挙された「産業者」は「職業」からみると、何と職人層が多い事か。

③ Owen, Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor, p. 157. Owen, Life by himself, p. 175 訳二二九頁。

④ サン・シモンについては遅開発の計画と実行は有名。又、《Exploitation de la nature》の觀念もある。フーリエについては Quatres Mouvements, (t. 1), p. 263.

⑤ Saint-Simon, Du systeme industriel, 5<sup>e</sup> vol., (XXI), p. 162. Fourier, Quatres Mouvements, pp. 240-1. 又、マンランジュに於ても下層階級が多過ると豊かな分配に支障を来たすと考えて人口数の固定を考えている。ibid., p. 239, p. 243.

⑥ Owen, Life by himself, p. 215. 訳二七五頁。

⑦ フーリエがオウエンを非難した点の一つは、オウエンの「村」が人口過剰なところ点にあった。Unité universelle t. 2, (t. 3), pp. 3-5. なお筆者は単位に暗いので、換算の精確さに自信はないが、フーリエの構想の方が単位人口当り少くとも三倍位の広さはある。オウエンは「オートビヤはむしろ人口増加を結果し、しかも人口過剰にはならな」と考えた。Report to the Committee of the Association, p. 168. 訳八八—八九頁。

⑧ Report to the County of Lanark, p. 253 and p. 258. 訳一一八頁—一二四—五頁。

⑨ Quatres Mouvements, (t. 1), p. 27. 訳世界古典文庫七三頁。

⑩ 「豊饒」を「百年の方」と云々。Nouveau Monde, (t. 6), p. 418. ⑪ Quatres Mouvements, pp. 357-358. 一方で投機商人の

倉庫に腐敗する程の食物があり、他方に食なく飢える人が居るといふ事應。

⑩ Owen, Report to the County of Lanark, pp. 247-248. "See cond—that....". G. D. H. Cole, op. cit., pp. 177-180.

⑪ オウエンの「村」の構想が失業救済の契機を強く持っていたのに対し、フーリエのマンランジュの構想は、商業の廃止(本稿一節参照)、農業の協同化(次節参照)、革命回避(五節参照)、快楽説(本稿では省略)、工業の弊害(無味乾燥な労働、失業、低賃銀)を契機としていると筆者は考える。失業問題は最後の一部に含まれているに過ぎない。

⑫ G. D. H. Cole, op. cit., p. 178. 従って「イギリス全体の『Productive Power』を過大評価する結果に生えなっている」と見つけ。Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor, p. 157. 参照。

⑬ ニュー・ラナーク工場経営者となる前に「ミュール綿紡機の製造をやった」。Life by himself, pp. 31 seqq. 訳五〇頁以下。又、技術者としても、従来より細い綿糸の製造に成功した。ibid., p. 48 訳七一—七二頁。つまり、オウエンはこれらの面でも先進的な人であった。

#### 四 農 業

サン・シモンの農業論については、坂本氏の間然する所のない分析がある。フランス農業の立遅れは主として資金

不足にあるから、借地農業者への資金の供給、土地の動産化を計るようサン・シモンは考えた。これは「革命によって広汎に創出された農民的小農経営を企業的大農経営へ転換せしめる」企図をもっていたと解釈できる。<sup>①</sup>

フリーエもまた小農経営を否定的に見た。個別経営では設備が不経済であり、財産の細分は貧困の原因でもあり、道徳上利己主義の温床でもあると考え、農業生産の協同化を一中心としてユートピアを構想した。<sup>⑤</sup>

一方は農業化、他方は農業の協同化という別の結論に達したけれども、発想の起源は農業生産の倍増でありそのため大革命後の小農経営を経営規模の面から批判した点が共通している。これに対してオウエンがむしろ独立小農経営の家庭生活を昔日への郷愁を籠めて賞揚しているのが印象深い。<sup>⑥</sup>

フランスでは周知のように大革命で分割地農民が作り出され、更にナポレオンの農業政策に於ても小農経営の方向は守られる。十九世紀前半、この方向に、農村人口の過剰というような危機が横わっていたとは云え、全体として見ればこの方向が貫徹する。現実の進行は二人の思想家の小

農否定論を敗北させるようなものであった。それだけに二人（特にフリーエ）は孤立せざるを得ない。<sup>⑦</sup>

農業技術改良については、フリーエの案は常識的であるが、オウエンの案は実に奇妙である。従来、家畜に引かせるすぎ「plough」耕作を止めて、人手による一種のシャベル「spade」耕作に代えよと、ユートピアの重要な計画として詳述している。<sup>⑧</sup> その計画では、「一頭の馬の代りに八人から十人の人間」が必要であるから、明らかに生産性の低下が予想される。にも拘らず「人手によるスピード耕作の方が農耕技術上ずっとすぐれている」という事を素人臭い議論で説き続けなければならなかった。ここにオウエンの苦衷がある。「製造業の労働者（つまり失業者）を農業方面で雇用」できまいかという、苦しい一策がこの計画案なのである。オウエンの場合、フランスの二人のように農業事情に即して農業生産の拡大を計るという企図は余りなかったのである。

このような差異は、いみじくもオウエン自身が認識したように農業国から工業国へ転換を遂げたイギリスと、サン・

シモン、フーリエ自身が認識したような農業生産国フランスとの差異を象徴している。<sup>13)</sup>

- ① 坂本、前掲書、七一七頁。
- ② 「三百の農家が組合化すれば、整頓されていなかっただ今までの三百の穀物倉庫は、手の行届いた一つの倉庫ですむし」Quatre Nouveaux, p. 11. 訳五六頁。
- ③ «l'Irlande....., par..... subdivision des propriétés, est parvenue au même dénuement», cité par Ch. Gide, p. 53.
- ④ *Unité universelle* t. 3. (t. 4), p. 519. 「単なるモイリストに過ぎない小経営農民」。
- ⑤ 着想のヒントになったものは、故郷のフランシユ・コンテ等で「チーズ製造のための製造業者組合又は農業協組合」ができていたことであろう。H. Bourgin, op. cit., p. 46.
- ⑥ Owen, *Observations on the Effect of the Manufacturing System*, p. 123. 訳五〇頁。
- ⑦ Felix Armand は、一八二六年頃の孤独なフーリエの姿を、パルザックの小説上の一人物に見立てて描写している。F. Armand, préface aux «Textes choisis», pp. 7-8.
- ⑧ *Quatre Mouvements*, (t. 1), p. 241.
- ⑨ Owen, *Report to the County of Lanark*, pp. 253-261. 訳一一八—一二九頁。
- ⑩ *ibid.*, p. 256. 訳一二三頁。
- ⑪ *ibid.*, pp. 253 seqq. 訳一一八頁以下。
- ⑫ Owen, *Observations on the Effect*, p. 120. 訳四六頁。
- ⑬ サン・シモンは、フランス農業の生産物は商工業のその七・八倍であると云う。坂本、前掲書、七一頁。

## 五 革命と戦争

オウエンにはなく、サン・シモン、フーリエにある思想形成の大きな契機として、革命と戦争に注目したい。

第一。フランスの二人の著作は、大革命とその後のフランス社会を混乱と無秩序の連続と見る危機意識に発したものである。<sup>①</sup>二人の労作の目的は、無秩序からの回生、新たな革命の回避にある。従ってまた思想そのものが革命回避、民衆運動忌避の性格を強く帯びている。<sup>②</sup>

第二。ナポレオン戦争もまた大革命に続く政治動乱として憂え、永久平和とヨーロッパの統合を二人共待望している。<sup>③</sup>

第三。戦争は経済上の無駄であり、革命暴動と共に産業の発展を阻害し貧困の原因であると考え、平和産業の振興の必要を説いている。また戦争予算の廃止が下層階級の福祉に貢献すると主張され、戦争に伴う公債発行も非難している。<sup>④</sup>

要するに、サン・シモンとフーリエの思想は、政治的な安定そのもののためのみならず経済成長や社会福祉のた

めにも国内平和と国際平和が必要であるという特色を持っている。

このような思想が形成された要因は何か。

第一に、サン・シモンの思想経歴の前三分の二期、フリーエのその前の三分の一期（共に思想形成の決定的な時期）に於ては、フランス史上未曾有の政治動乱が続いた。この革命や戦争が思想家個人の運命を左右したり、激動期の憂うべき光景が眼前に広がったりした時、それが思想に映じない筈はない。

サン・シモンもフリーエも、大革命については、（イ）大革命を半ば破壊的なものと考え（ロ）そのような破壊と混乱は誤まれる科学者、啓蒙思想家の煽動によって惹き起されたとし（ハ）身分的差別徹底・立憲君主制下の改革程度なら賛成するが、革命運動・民衆勢力の政治担当（ジャコバン独裁下）は以ての外であると考えた⑩三点で共通している。

このような類似の革命観を抱くようになったのは、大革命への巻き込まれ方が似ていたからである。（イ）一七八九年から九一年頃までの立憲君主主義の革命段階にあって

は、二人とも革命賛成派・受益者になるような境涯にあり、事実はまたそうだった。伯爵サン・シモンは早くから啓蒙思想の感化影響を受けアメリカ独立革命にも参加して自由の精神を謳歌していた上に、領主制的財産の相続を受けていなかったから⑪（もし持っていたら革命賛成行動へ踏み切る障害の一つになる筈のものがなかったから）、サン・シモンは典型的な自由主義貴族として革命賛成の行動を取った。更に折柄の国有財産売却に際して、それを種の投機に手を出し一財産作り上げるといふ、奇妙な意味での革命の受益者でもあった⑫。フリーエは、親譲りの大商人という境遇からして、国内関税廃止等を含むこの革命段階では、特別賛成行動をしなくても自然の賛成派であり受益者であり得た。（ロ）ところが、革命の激化、九三年のジャコバン独裁が成立する革命段階では、二人はそれぞれ、明白な理由が何もないのに、公安、保安委員会命令で逮捕投獄され、その間死刑にされそうにさえなつて、自由の身になったのはテルミドール反動の後である⑬。このことを通じて、政治とは時に恐るべき無法な暴力であるという事を身に沁みて感じたに違いない。中、フリーエだけにあっては更に、物資徴発とい



う革命の暴力(無辜の民、中立の彼にとつては強奪と同じように無法な暴力)<sup>⑬</sup>がふりかかり、彼のその後の運命を決定的にしてしまった<sup>⑭</sup>。

以上の革命体験こそ、革命恐怖、政治即悪、現今社会即混乱という意識を二人に根強く植えつけたと思う。

革命回避・反戦平和思想形成要因の第二。既に、社会のあり方について理想家となっていた時にナポレオンの軍事独裁が成立した。二人ともナポレオンによって利益を得る階層(資本家、分割地農民)に属して居なかつたばかりか戦争の傍杖を食らい兼ねない一般の人であつたから、ナポレオン戦争を合理化する必要がなかつた<sup>⑮</sup>。戦争を合理化する方が自然であるような境位にあつたオウエンと違って、二人は社会理想を率直に述べればよかつた。

十九世紀前半のフランスは「フランス革命是か非か」を争点として思想史政治史が動いた半世紀であり、ナポレオンの影響も後々まで残る。今まで産業経済の視点からのみ扱われる事の多かつたサン・シモン、フーリエもその圈内にあつたのであり、その思想形成に於てはこのような非経

済的要因が大きいと思う。経済を見る場合でも、非経済的なものが、いかに経済を阻害しているかと見ているのである。

それに対してオウエンの場合、革命も戦争も、それ自体としては社会の危機を招くものとして問題にされてはいない。その理由は、オウエンが対岸の革命の余波を受けた事はなく、又、英国の対ナポレオン戦争については、肯定すべき理由さえあつたのである。第一に、戦争の勝利は英国産業の力を示し国威を発揚したといふのである。<sup>⑯</sup> イギリス人はやはりイギリス人である。第二に、戦争は、いわば国内問題の休戦状態を保つてくれ、その間オウエンの「資本家的保護主義」の枠を安全に放置しておいてくれた。オウエンが意識していなかつたかも知れないこのような事情もあつた。

① ④ 時期として文筆活動に入るのは、二人共、未だ革命暦で年を云わねばならない頃である。サン・シモンは、一八〇三年に処女出版。

フーリエは、一八〇〇年新聞寄稿。Bourgin, op. cit., p. 11.

① ② 二人共、いかに「無秩序」「混乱」「無政府」その他の類似用語を同時代の社会状況を云うのに使うことか。それらは、彼らの理想 Organiser, Harmonie, 等の反対用語である。

①の② 「一七九三年以来、フランス國民は『désorganisation』の狀態に陥つた。……』の狀態は未だ終つてゐない。」 Saint-Simon, *L'Industrie* (1817年), 2<sup>e</sup> vol., (XXVIII), p. 174. 「社會の發展運動を逆方向にせよといふ二つの間違ひ……最初は「一七九三年……」 Fourier, *Quatres Mouvements*, t. 1, pp. 398-399.

② ① サン・シモン。処女作は、革命を未然に防ぐためのものであり、後年の『産業体制論』は「未だ続く革命を終らせる」ためのものである。 *Lettres d'un habitant de Genève à ses Contemporains*, 1<sup>er</sup> vol., (XV), p. 29, pp. 31-32. *Du système industriel*, 5<sup>e</sup> vol., p. 89. ② ノーリテ。三大社會悪に對したその①の①の「革命 les révolution」の發見は「革命による傷口を癒はせよといふべきではない。」 *Le sommaire du Traité de l'Association domestique agricole*, (1823?), p. 185, cité par E. Silberling.

③ 特にノーリテの場合、普通の政治活動（政治結社）を完全く嫌悪してゐる。彼が憎んだのは、商人に次いで政治屋である。 *Unité universelle* t. 4, (t. 5), pp. 422-3.

④ ① St-Simon, *Memoire sur la science de l'homme* (1813), 11<sup>e</sup> vol., (XL), p. 40. *De la réorganisation de la société européenne* (1814), 1<sup>er</sup> vol., (XV), pp. 53 seqq. ② Fourier, *Trinuvirat continental et paix perpétuelle sous trente ans*, 1803, (t. 1), pp. 457-460. ③の著作ベノーリテは「ノーリテの和約中になお迫り来る戦争の危険を感じながら、「永久平和」を願ひ、素人臭い政談をして、「やがて大國によるヨーロッパの統合が可能になつ」と考へてゐる。サン・シモンの *De la réorganisation* 一対の著作に云うべきであらう。

⑤ ① サン・シモン。革命家政治家が産業者の活動を阻害して来たこと

に、 *Du système*, 5<sup>e</sup> vol., (XXI), p. 56. 「人民の蜂起は産業に對して最も負担をかける。」 *L'Industrie*, 3<sup>e</sup> vol., (XIX), p. 159. サン・シモンは平和産業を萎縮させたワケ、英國商品の統制による資本を破壊したワケといふ。 *ibid.*, pp. 216-7. *Catechisme des Industriels*, 8<sup>e</sup> vol., (XXVII), pp. 121-122.

⑤の② ノーリテ。破壊的な戦争のために実に大きな費用を使つてゐるが、建設目的に使へない。 *Unité universelle* t. 3, (t. 4), pp. 559-562. 「軍隊制度は若く労働力に租税を奪ふ去つていかに」 *citée par Ch. Gide*, p. 62. dans *Œuvres choisies*.

⑥ Saint-Simon, Brouillon, intitulé *«Deuxième brouillon»* (vers 1817), cité par J. Dautry dans *«Textes choisis»*, p. 142.

⑦ Fourier, *Nouveau Monde*, (t. 6), p. XIV.

⑧ Saint-Simon, *Lettres d'un habitant*, 1<sup>er</sup> vol., (XV), p. 30. 大塚訳六八一―六九頁。 Fourier, *Quatres Mouvements*, (t. 1), p. 293. 二人共、啓蒙思想が破壊をして建設をする所がなかったから各自の科学を打ち擧げるのである」と考へてゐる。

⑨ シヤノンに独裁及び民衆支配を嫌悪した。 Saint-Simon, *Lettres d'un habitant*, 1<sup>er</sup> vol., (XV), pp. 46-7. Fourier, *Quatres Mouvements*, (t. 1), p. 395.

⑩ 父は「帯剣貴族であり勝ちな貧乏で、借金を残して死んだ。革命初期には、サン・シモンは殆ど資産を持たず、住家をも母の持家であった。 *Certificat donné à Saint-Simon par le maire*, cité par M. Leroy (op. cit., p. 126). F. M. H. Markham, *Introduction to «Henri Comte de Saint-Simon, selected writings»*, 1952, p. xi.

⑪ 革命中の行動については M. Leroy, *La vie véritable du Comte Henri de St-Simon*, 1925 に拠る。但し、サン・シモンが「サン・

キユロット」的であったという意味の表題は比喩として考える。

⑭ サン・シモンの逮捕理由については諸説あり。ibid., pp. 160-162. とにかく、Certificat をいくつも持たねばならなかったりする所から考えても、本人に納得の行く理由がなかったのに取り調べを受けたりしたのではなからうか。又、サン・シモンの近親も何人か逮捕されたり死刑に処せられたりしたのもこの頃であり(F. Manuel, the New world of Henri Saint-Simon, 1956, pp. 24-26.) ャン・シモンも覚悟を決めていたであらう。

⑮ ⑯ フーリエ。Bourgin, op. cit., p. 38.

⑰ リオン蜂起に際して、もしフーリエがフェデラリスムかジャコビニスムか明確な態度を取れるような人間ならば、徴発を受けても責は自らにあった。しかし、二十歳そこそこの商人で、しかもジェズイット宣教師たちから平凡な古典教育と宗教教育を受けただけ (Bourgin, op. cit., p. 31 note 4) では、リオン暴動に賛否のいずれも示しようのない無辜の民に過ぎなかった。だから徴発(一七九三年頃あれだけ広汎に行われた réquisition) を無法なものと考ええるのも当然であらう。

⑱ Pellarin, Vie de Fourier, p. 45, cité par H. Bourgin.

⑲ なお、J. Dautry の考証によれば、共和主義者で昔のバブーフ主義者 R. Bazin は、反ナポレオン陰謀に関係していたが、サン・シモンもこの人物と関係があったかも知れないと云う。J. Dautry, Saint-Simon et les anciens babouvistes de 1804 à 1809, A. H. R. F., t. 32, 1960, pp. 514-529. しかし、サン・シモンの性格と思想からすれば、体制の顛覆まで考えたわけではなからう。

⑳ 前川貞次郎『フランス革命史研究—史学的考察』二頁。

㉑ オウエンは、ナポレオンの支配と征服戦争を、利己的原理から惹き起された悲惨と考えて、道徳的に非難してゐる (A New View of

society, p. 18, 訳三二頁) が、別の箇所では、イギリスの対仏戦争は当然であると考へ、母國の立場を支持し、又、イギリスの勝利はその産業力にあつたのだと誇つてゐる。Observations on the Effect of the Manufacturing System, p. 121, 訳四七頁。Report to the Committee of the Associations, p. 157, 訳七三頁。

㉒ Cole, op. cit., pp. 170-172.

## 六 私所有財産・資本

サン・シモンは、ブルジョアの所有をむしろ力強く讃へ、資本所有の不平等も肯定した事は周知の事であろう。① 唯、財産制を永久不変のものとはせず、生産に好都合な状態に組みかえる必要を主張しているという特色がある。②

フーリエは、オウエンの「共產主義精神」を激しい口調で攻撃し、③ 又、師とは違うサン・シモン主義者の財産相続制否定にも反対した。④ しかも「ファランジュ」は、「共同体」という訳語が不適当なのであって、一種の株式組織で成り立ち、ファランジュ内で生み出される全生産物とサーヴィスの中、出資金の配当分に割当てられる分は全体の三分の一の高額に定められている。⑤ 又、ファランジュ間の富の差を認め、ファランジュ内の共同設備の利用が有料であ

る事も考え合せれば、フーリエは経済上の平等を強く希求していなかったと判断してよく、資本への大きな譲歩が印象的である。

オウエンも特に初期には、利潤や資本の配当を認め、単に大き過ぎる利潤の盲目的追求のみを批判しただけであったが、後年「利潤の廃止」を考え、「貧困の原因としての私的所有の廃止」を考えるに至った。<sup>⑧</sup>「ファランジュ」には見られない分配の共産主義原理も、オウエンの「村」には明確にある。<sup>⑨</sup>

フーリエとオウエンとの差異は、ユートピア建設の資金調達方法についても存在する。フーリエの場合、金持同志で資金を出し合い自分たちだけのファランジュを結成する事が可能であり、又、貧乏人のためには貧乏人自身の零細な資金を集めようと宣伝文句を並べて居り、<sup>⑩</sup>実際には空しく特志家の来訪を待ち続けただけである。他方オウエンの資金調達は、勿論フーリエと同じ方法もあるが、公共団体の基金や租税を狙っている点を筆者は注目する。<sup>⑪</sup>更に次節で述べる事を併せ考えると、オウエンでは、社会政策の主体の把握がより明確であると云わざるを得ない。

以上のような差異をめぐって乱暴な説明を試みる。サン・シモン、フーリエが共にフランス産業の立ち遅れを憂えていた事をも考慮に入れて推論すれば、生産力の増大のために二人は絶えず資本の不足を感じていたから資本に対して譲歩したのではないかとすれば二人は資本観の点でも後進国フランスの経済社会を背景にしていた事になる。

オウエンが「貧困の原因は資本不足にあるのではない」と明言しているのは、他の二人と全く対照的である。オウエンの周囲には持分を募ればすぐ応ずる資本家が何人も居り、この事情はイギリス全体にもある程度妥当な事であったろうから、オウエンの関心は資本量によりも利潤の運用面に注がれた。

① L'Industrie, 3<sup>e</sup> vol., p. 89, p. 43, p. 83. L'Organisateur, 4<sup>e</sup> vol., (XXX), p. 151. Du système industriel, 5<sup>e</sup> vol., (XXI), p. 49.

② L'Industrie, 3<sup>e</sup> vol., (XIX), p. 90. L'Organisateur, 4<sup>e</sup> vol., p. 59.

③ Fourier, Nouveau Monde, p. 473.

④ Lettre à Maitron, 28 janvier 1831, citée par Pellarin, Vie de Fourier, p. 117. (H. Bourgin, op. cit., p. 104, note (2))

原文引用による)。

- ⑤ Unite universelle, t. 3, (t. 4), p. 517. 全体量から資本の配当分を取り去った後の分(全体の三分の二)は、才能と勤勉とに比例して配分されるのであるが、資本への配当分がかなり大きい点に注意。
- ⑥ 年率五パーセントの資本への配当は認め、それ以上の利益を労働者保護に用いた。
- ⑦ ジイド、リスト、前掲訳書、三三七一三四五頁。
- ⑧ Owen, the Book of the New Moral world, part sixth, London, 1844, pp. 40-41. 但し A. M. Deborin, op. cit., p. 614 に引用された所に拠る。
- ⑨ Report to the County of Lanark, p. 288. 訳一六七頁。「めいの人々は、共同体の共同貯蔵所から、なんでも好きな程自由に受け取る事ができる」。
- ⑩ Fourier, Quatres Mouvements, (t. 1), pp. 173-4. 訳一三五頁。
- ⑪ Unite universelle, t. 1, (t. 2), p. 199.
- ⑫ Ch. Gide, 《Introduction》 aux 《Euvres Choieses》, p. VI.
- ⑬ Owen, Report to the Committee of the Associations for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor, pp. 166-7. 訳八六頁。Report to the County of Lanark, p. 285. 訳一六一頁。
- ⑭ フランス産業の立ち遅れを憂念したのは、ある程度思想的立場を越えて当時のフランス人に共通のものがあつたのではなからうか。即ち、フーリエが、「ナントの勅令の廃止の時、工業従事者の亡命だけでも防いでいたならば、商工業の衰退は回復できたであらう」(抄) Quatres Mouvements, (t. 1), p. 390 と云つてゐる。他方、フーリエと同時代の保護主義者の Chapter もナントの勅令の廃止を残念がっている。シャプタルについては、吉田静一『フランス重商主義論』

一九六二年、二四五頁。

- ⑮ サン・シモンについては、前述のように農業に於ける資本不足論。又、サン・シモンが銀行業を産業組織化の司令官の地位に置いたのも、資本不足の認識に関係があるのでなからうか。又、フーリエについては、「……土地・機械・道具・工場(仕事場)の不足や他の欠陥が、絶えず文明の産業を麻痺させている」(傍点筆者) Unite universelle t. 4, (t. 5), p. 128.
- ⑯ Owen, Report to the County of Lanark, p. 248.
- ⑰ Owen, Life by himself, p. 123. 訳一六七頁。

## 七 議会・労働組合

サン・シモンが『組織者』等で公共福祉事業の政策を待望している点ではオウエンと軌を一にするものであるが、しかしその社会政策の実行主体については、(イ)国王個人に(ロ)学者・技術者等の立案に(ハ)財政の裏付を含め政策の執行の全権を上層の産業家に委任するという三案を、サン・シモンは考えて考えている。サン・シモンの雇傭対策については自由主義と区別がつかない。<sup>①②③④</sup>

フーリエの場合は、最低生活の保証(「保障主義」)の主張も又、論理上オウエンと同じ社会政策を要求するものである。にも拘らず、フーリエの思想は、政治そのものに深い

嫌悪の情を示すだけで、国家・政治を通しての理想実現をどう考えているのか全く見当がつかないような思想である。

この両者に比してオウエンは、現行のイギリス憲法を信頼し、その枠の中での改革が可能である事を述べ、貧民の福祉を「立法的処置」によって改善する希望を早くから抱いた。<sup>⑤</sup>「国家による失業救済」を主張して自由主義者と見解を異にした事はオウエン自身が語っている。<sup>⑥</sup>やや遅れて實際活動面でも、下院委員会への出頭、議員立候補、工場法制定の努力をしたが、失敗又は不満足な成果しか得られなかったにせよ、それは、「労働保護立法の創始者オウエン」<sup>⑦</sup>と呼ぶにふさわしく、議会民主主義による社会問題の解決の可能を実証した。

その上、一八二〇年代から三四年に至るオウエンと労働組合運動との接触、及びその接触から生れた「公正労働交換所」の思想と実践とがあるが、それについては、詳述の余裕はない。

要するに、三人の社会改革手段に労働者の団結と闘争が欠けているとは、エンゲルス以来繰り返された事であった。が、その後の歴史によれば、革命を指向しない労働運動と

議会立法という二つの手段の有効性も実証された。この二つの手段を早くも掴みかけたのはオウエンであって、サン・シモン、フリーエではない。<sup>⑧</sup>

このような差異（今日の社会民主主義の立場から見て重要な差異）の起源は、本来彼らの思想の中にあつた差異にも求める事ができるが、主として彼らの地位、そして勢いの赴く所にあつたと考えられる。

第一。フランスの二人は、推定するに選挙権も被選挙権も持ち得なかつた。<sup>⑩</sup>一般に社会的に無力な人間の考える改革手段は、救世主待望（宗教人）、蜂起（ルン・プロ）、団結（組織労働者）、無政府主義的非政治的ヒューマニズム（青白きインテリ）のいずれかに陥り易い。啓蒙思想の世俗主義<sup>⑪</sup>と前述の革命体験とが前の三つを二人に禁じていたからには、サン・シモンとフリーエに残された道は、最後の四つ目の道（二人の中殊にフリーエがたどつた道）が、又は改革には不適當な政治勢力・社会勢力に頼る提案（殊に前述のサン・シモンの提案）をして見るかである。

オウエンは改革運動当時に社会的地位も高く被選挙権<sup>⑬</sup>

も持ち、いわば体制を担う人間であった。体制を担う人間が改革を志す時、先ず既存の政治機構を通ずる方法を取るのは自然である。(なお、この上にオウエンの実務家的実践的な性格<sup>⑭</sup>も加わっている点は、従来の論者の指摘する所である。)

第二に、当時のフランスでは労働者の組織化と運動が殆どなかったが、イギリスではそれらが現実にかなり広汎に始まっていた<sup>⑮</sup>。そしてオウエンの「全国労働組合大連合」議長就任。勢いの赴く所とはこの事である。<sup>⑯</sup>

① L'Organisateur, 4<sup>e</sup> vol. (XX), pp. 51 seq.

② Du système industriel, 5<sup>e</sup> vol. (XXI), pp. 106-9. 中に表われたノートピアの政治組織中、財務省・産業院等は国家予算の決定と運用を要する機関として重要なものであるが、この構成メンバーは、殆ど全く上層の産業ブルジョアから成るように仕組まれている。例えば「もっとも多数の労働者を雇備する製造業者」等と指定されている。それらの組織の目的は「プロレタリアの生存を保証する」(p. 107)事にあるのだが、実際問題としてこれら大企業家達がどれ程公共の政策的立場に立つ事ができるか怪しい。サン・シモンは、改革をそのような社会勢力に頼ったのである。

③ L'Organisateur, 4<sup>e</sup> vol. (XX), p. 152.

④ Fourier, Unité universelle t. 2. (t. 3), p. 15. Fausse Industrie, p. 391.

⑤ Owen, A New View of Society, p. 21 and p. 67. 訳三七—一〇頁。

⑥ ibid., p. 37 and pp. 83-seq. 訳六一—六四頁、一三六—一三八頁。Life by himself, pp. 178-9 and p. 161. 訳三三—三二二頁。

⑦ E. Doleans, op. cit., pp. 159-193.

⑧ 誤解をさけるために、附言すれば、サン・シモンは、議會制、選挙制そのものについては、君主制の下で推進する事に賛成であった。入タムの選挙法改正運動に条件付で賛成した事 (L'Industrie, 3<sup>e</sup> vol. (XIX), pp. 13 seq.)、反動的な二重投票法反対デモに参加した事 (J. Dautry, op. cit., A. H. R. F., t. 32, 1960, p. 529)はこれを物語っている。しかし、それは上層ブルジョア階級、せいぜい下層で借地農の政治参加と産業の発展のために考えたのであって、労働問題の解決のためや資本家の恣意抑制のために議會制を問題にしたことはない。

⑨ 五節参照。

⑩ 王政復古の選挙資格は年三三〇フランの直接税納税額を最低とする。(F. Pontell, La monarchie parlementaire (1815-1848), 1949, p. 31, pp. 47-48.) それに対して、サン・シモンは生活の浮沈が激しいが、他人の好意によって生活する事も多く、赤貧に陥った事もある。フーリエの年収は、千から千五百フラン位であった。(Ch. Gide, Introduction aux Œuvres Choisiées, p. VII.)。肉体労働者よりは、やむを得ぬ程程の収入である。

⑪ サン・シモンは思想教養の上から「最後の百科全書派」(J. Dautry)と云え、最後の著作「新キリスト教」も宗教というより世俗道徳である。フーリエの快樂説は、明らかに「反禁欲主義」(C. Douglé)の道徳的批評 Rabelais 及び Helvétius 等の影響が推定される。

⑫ サン・シモンは、「最も貧しい階級の境遇改善」を唱え続けている。中にあるのも、その唱道が「貧民階級を駆って金持や政府に対する暴力行為に赴かせることのないように」懸念していなければならなかつた。

た。 Saint-Simon, *Nouveau Christianisme*, 7<sup>e</sup> vol., (XXXIII), p. 179. 大塚訳一六三頁。フーリエは「一七九三年の過度の政治的自由は、モローンを野蠻状態に陥れた」(Quatres Mouvements, (t. 1), pp. 388-9)と云つてゐるように、政治上の自由を疑わしく考へるようになった。

⑬ Owen, *Life by himself*, p. 48. 訳七一七三頁。

⑭ Owen, *A New View of Society*, pp. 20-21. 訳三六一三三頁。

⑮ H. Sée, *la vie économique de la France sous la monarchie censitaire* (1815-1845), 1927, p. 124. P. Louis, *op. cit.*, pp. 54-5. として、当時のフランスの労働者が協調的である事を他ならぬサンシモンが明確に捉えていた事に注意しかう。 *De l'Organisation sociale*, 10<sup>e</sup> vol., (XXXIX), p. 124.

⑯ Morton and Tate, *The British Labour Movement*, pp. 50 seq. 特に一八二四年から一八三四年の十年間。

⑰ G. D. H. Cole, *op. cit.*, p. 10.

## 結 び

サン・シモン、フーリエ対オウエンの思想上の差異を要約すれば、

(一) 遅れた生産力の発展を如何なる体制によつて行ふかのプラン、生産力の発展を阻害するものを如何に排除するか  
のプランが前二者であり、従つて下層階級への同情にも拘らず、具体策では数々の現状肯定を含む。それに対し

て、生産力の急激な発展後の行き詰りをどういふ政策と体制で打開するかというプランが後者であり、従つて下層階級改善の具体策として数々の現状改良の諸策を含む。

(二) オウエンは、革命によらない社会問題解決方法(民主的労働運動と議会民主主義)を掴みかけている。

このような差異が生じた原因は、個人差と仏英社会の差とが重なり合った所にある。(一) 一方はフランスの政治動乱、他方はイギリスの産業革命という各国史を動かす力の仏英差。(二) 一方は、政治動乱によつて何ら利益を受けなかつた小市民階級の中の二人がフランス産業の後進性を知る。他方はイギリス産業革命の担い手が労働問題に直面し続ける……という具合に個人差が重なつたのである。

以上、フランス人はフランス人であるという極めて自明の事を語り続けたに過ぎない。唯、思想史が一つの解釈である限り、明敏な二人の思想史家の解釈に対して、平凡な解釈に立ち帰ろうとするのも一つの立場であると考えるに過ぎない。「空想的社会主義者」の見方も「組合派社会主義者」の見方も、思想の共通点を踏まえている限りそれを



全く棄て去る事は不可能であり、しかもそれぞれ研究者の思想的立場に裏打ちされている以上、前者はマルキシズムと共に、後者は協同組合運動と共に生き続けるに違いない。況や両者から「社会主義者」の語を取り去りそれぞれ「ユートピスト」、「協同組合学説家」とすれば、それらの用語はなおのこと長命であろう。<sup>②</sup>

にも拘らず、初期社会主義の時代にも、現代社会主義の時代に劣らぬ(むしろより以上に甚しい)各国社会経済の不均等発展があったからには、そして又、続く現代社会主義史も各国史の基盤にしか展開し得ないからには、初期社会主義の各国比較が必要かつ可能であると思う。本稿で示した差異点の数々は、エンゲルスやジイドとは別の見方が充分可能である事を証明し得たと信ずる。

では、初期社会主義のフランス的特色とは何か。未だ他の思想家(就中ブルードン、ブランキ等)の考察を残しているが、筆者の覚え書を許して頂きたい。

(イ) イギリス初期社会主義は、マンチェスターとロンドン、産業革命を除いては考えられない。フランスの初期社会主義は、産業革命の認識を除いても成立し得、経済外要

因によって惹き起された経済上の損失等の認識から誕生した面が大きい。

(ロ) フランスでは、労働組合法、工場立法的な発想が余りなかったか又は遅れて現われた。

(ハ) 労資関係という思考法以外に、商人の収奪、貴族の寄生性といった思考法があり、サン・シモン、フーリエだけでなく、バブーフ、ブランキ等に共通している。<sup>③</sup>

(ニ) 社会問題の解決方法として、改良主義の系譜の思想家は、非政治的無政府的になり易く、革命主義の系譜の者は、少数者による暴動を起し易い。いずれも組織的な民衆運動との関連が少い。

これらの浅い仮説がすぐにも崩れ去るように、フランス社会思想研究の進展を願って擱筆する。

① 「空想的社会主義」概念は、フーリエ派とサン・シモン派との融合現象や更にオウエン派との融合(ピエール・ルルー、カベの場合)といった先立つ歴史事実があって成立したものであるが、直接には、他の初期社会主義に対するマルクス・エンゲルスの理論的対抗の必要が大きな成立契機になっている。又、「組合派社会主義」概念を作ったジイドは、「ニーム派」消費協同組合思想家の中心人物である。(平実、『市民革命と協同思想』一九六〇年三〇七頁以下)。

② 『Socialisme』とは何と時代的にも個人的にも意味合が異なる事か。

そこから、例えばフリーエが社会主義者か否かという事が問題にされて結着がつかなくなる。M. Leroy, *Histoire des idées sociales en France*, t. 2, 1850, p. 291, 11, 14 seqq.

③ 豊田莞『パブーフとその時代——フランス革命の研究』一九五八年四一四頁。柴田朝子『十九世紀フランスの革命思想——オーギュスト・

ブランキを中心として』(岩間徹編『変革期の社会』一九六二年所収) 九九—一〇一頁。

(一九六五年七月二九日稿)

(京都大学大学院学生)

The Mongolian Invasion into India in the  
13th and 14th Centuries

by

Toshiyuki Etani

From the invasion of the Mongolian army under Chinggis-Khan at the beginning of the 13th century, the Mongolian made a repeated raid on the north-western India till the 14th century. The first invasion was projected to dissolve the Khwārizm-Shāh dynasty and to secure the possessory right of the principal road between East and West, happened to reach the bank of the Indus in pursuit of the south-routing Khwārizm-Shāh king. Soon, with establishment of the kingdom of Chaghatai-Khan, the Mongolian started the earnest invasion to India and threatened the back of Sultanat in Delhi, the development of which this article tries to trace with the examination of its historical importance.

Saint-Simon, Fourier and Owen

—A Comparison between French and  
English Socialist Thinkers—

by

Toshio Horii

Saint-Simon, Fourier and Owen were almost contemporary socialist thinkers in France and Great Britain, and up to this time these three have been regarded as “Utopian socialists”, and especially Fourier and Owen as “associationist socialists”. But, when their ideas are examined, their shades of opinion lead us to another interpretation. Though they thought of the protection of laborers, the difference between Saint-Simon and Owen is great; in spite of the same plan of utopia, their attitude towards the actual society was different. On the other hand, the fellow countrymen, Saint-Simon and Fourier, have many points of similarity in their social thoughts.

This article presents that their own ideas reflect in turn the fate

of their countries and their status, that is to say, Saint-Simon, noble, Fourier, a shopman, and Owen, a factory owner.

Historical Geography of *Ina* 猪名 Manor under the Rule  
of the *Tôdaiji* 東大寺 Temple in the *Settsu* 摂津 Country

by

Hisao Watanabe

This article will throw light on and determine the point of location from its natural conditions in regard to *Ina* manor, one of the territories under the *Tôdaiji* Temple, and its process of cultivation by the ancient written plan. In the middle of the 8th century, the land, under the rule of the Imperial Household before, was contributed to the *Tôdaiji* Temple; this neighborhood, as located at the end of the alluvial plain, was under remarkable development and was a hopeful manor. The plan of the *Ina* Manor, handed down to us and written about the 12th century with some mistakes, was the valuable material which told us the contents of the manor and the structure of the *Jôri* 条里 System. From the examination of the ancient plan, it has been made clear that three periods were expressed in this plan; that is, the periods of the Imperial Household's rule, of opening cultivation under the *Tôdaiji*'s possession, and of the *Tôdaiji*'s cultivation of the seaside district; and the very cultivating method, like *Wajû* 輪中 by circular banking, was adopted, showing a concentric circle at the core of the former Imperial Household's territory. The cultivation of the seaside districts, different from forest and field where land already existed, should be performed from creating land itself to be cultivated at first; but in this area was a distinguished formation of seaside sandbank from ancient times under the influence of topographical and meteorological conditions, which was of great use for the land creation, though on this relation to eustasy, to our regret, we have not yet decisive evidence.